

2022年10月30日 半田朝礼拝

午前 9時00分・10時30分

司会 山田紀子

奏楽 遠藤幸代

前 奏

招 詞

I コリントの信徒への手紙 第6章19節-20節

讃美歌

讃美歌 21-209-1 (めさめよ、こころよ)

交 読

十戒 (讃美歌 21 p. 144・93-3)

祈 禱

聖 書

使徒言行録 第17章22~31節

(新約 p. 248)

讃美歌

讃美歌 21-289-1 (みどりもふかき)

説 教

使徒信条で一番最初にわたしたちが言葉にするのは、「我
は天地の造り主、全能の父なる神を信ず」です。この一番最初
のところをもっと単純な言い方をしますと、「わたしは神さまを

信じます」ということですし、「神さまに信頼して生きる」ということです。この言葉を更に言い換える人もいまして、それは「わたしはひとりではない、孤独ではない」ということ。神さまを信じるということは、「もはやわたしは独りぼっちで生きていくのではない」と言えるようになることだと言います。そうだと思います。

マタイによる福音書は、イエスさまがお生まれになることを告げた時に、イザヤ書第7章14節の言葉を引用しました。「見よ、おとめがみごもって男の子を産むであろう」。そしてこのインマヌエルという名を説明して、「これは『神われらと共にいます』という意味である」と言いました。ですから、わたしたちはイエスさまの誕生以来、「神われらと共にいます」と言えるようになりました。そこにこそわたしたちの救いがあるということです。ある人は、ちょうど巡礼者が一人で巡礼をする時にも、必ずその笠に、「同行二人」と書くように、わたしたちは、人生の旅を神さまと二人連れで歩くことができるようになる

りました。信仰とは、この「神が共に、一緒にいてくださるのだ」という事実を受け入れて、それを望みとして生きていくことです。

ただそうであれば、とても単純なことですが、この「わたしは神さまを信じます」という言葉をはっきりと口にするようになるには、なかなかのことかもしれません。というのも、何年経てば言えるようになるというものでもなく、5年、10年、20年たっても、この言葉が、心からの言葉にならないもどかしさの中に、立ち続けている方もあるだろうと思うからです。

わたしたちは誰でもそうですが、はじめて教会に通い始めると求道者と呼ばれるようになります。この求道ということ、神さまを信じていることができるようになるまで求め続けるということは、いったいどういうことなのでしょう。求道という言葉の意味からしても、わたしたちが理解しているのは、道

を求めている人のことだ、だから、いろいろな問いをもっている人のことであるという理解だろうと思います。求道者が問いかける、疑問を述べる。そうしますと、教会ではそのための責任を持っている牧師や役員、あるいは皆さんの中にも教会の働きに一所懸命奉仕しておられる方は、そういう問いに何とかして答えてあげようとする。どこか自分でももどかしさを感じながらも、忍耐を持ってそうした問いに答えようとする。わたしたちが答える答えがやがて、神さまからの答えになる。つまり道を求めている方の問いに、神さまが答えて下さり、神さまをそんなふうに見つけることができたときに、「わたしはついに神さまを信じることができる」と言えるようになる。それが求道の歩みだと考えているのではないでしょうか。

実際、そうした神さまへの問いかけをしている人に、何とかして信仰をわかってもらおうと努力している本が幾つもあります。現代は神さまの存在なんか信じられないのだから、どうしたらいいのか。そういう問いが当然出てきます。ですか

ら、答える方も一所懸命に答えようとします。なかにはとても親切に答えを出して見せようとします。

ただここで、わたしたちがよく考えたいことがあります。たとえば、時折引用することがありますが、信仰問答という文書があります。いくつかのものが 있습니다。最初の問いだけでも見ると、実は少々違和感を持つかもしれません。というのも、たとえばある信仰問答の最初に出てくる問いはこうです。「人生の主たる目的は何ですか」。答え、それは「神を知ることです」。それから、その同じ信仰問答の三番目の問いも面白い問いで、「人間の一番の幸いとは何ですか」というのです。この問いに対する答えは、「それも同じ」となっています。とてもぶっきらぼうな答え方です。「それも同じ」。何と同じなのか。「やはり神を知ることだ」となっているわけです。

わたしたちが一所懸命神さまを求めている時に、そうした思いを抱えながら問うことは、まず「わたしたちはなかなか

神さまを信じることができないがいったいどうしたらいいのですか」という問いだろうと思います。あるいは、わたしたちの方からまず問います。「人生の目的とはいったい何ですか。自分は一所懸命に求めているのですが、よく分かりません。神さま、あなたなら答えてくださいますか」。そういう問いに対して、理解と憐れみをもってその悩みに答えてくれればよいと思います。ところがここでは違います。いきなり「人生の主たる目的は何ですか」。答え、「神さまを知ること」。いかにもぶっきらぼうです。あるいは別の信仰問答では最初の問いが「生きている時も、死ぬ時も、あなたの唯一の慰めは何ですか」となっています。答え、「生きている時も、死ぬ時も、主イエス・キリストのものであるということです」となっています。これも生きている時も、死ぬ時も、わたしたちは神さまのもので、と言っているのです。ここで紹介した信仰問答のそれぞれの基本になっている、問いと答えの仕組みは別ものではなく、変わることはないのです。つまり、わたしたち人間が何か尋ねて、神さまがそれに満足する答えを与えて下さる。そ

してその答えによって、「なるほど、その答えは気に入りました。そういうのであれば、洗礼を受けてあげましょう」。うっかりするとそんなふうに答える気持ちにさせてしまいかねないような信仰の姿勢が現れてくるような問答にはなっていません。

もっと突っ込んで言えば、この尋ねる教会の背後には神さまがおられるのです。「あなたの人生にとっての目的は何ですか。あなたにとっての本当の幸せとは何ですか。それをあなたは何だと思えますか。それはわたしを知ることはありませんか。どうですか」。あるいは、「あなたが生きている時も、死にそうになっている時も、変わらずに慰めとなるものは何ですか。それはキリストのもの、わたしのものだということではないのですか」。神さまがそう言ってくださるのです。だから、ここで問われるのはわたしたちの方です。人間が尋ねて、問うて、神さまが答えてくださることに先立って、神さまからの問いに、わたしたちが何と答えたらいいのかということが問われ、その答えまで神さまご自身が与えて下さったのです。

そういう意味では、聖書はわたしたちが関心を抱く神さまの存在に興味を持っていないことが分かります。神さまの恵みを疑わしく思っているようなときに、神さまがおられるというのはこういうふうに証明されるのではありませんか、いいえ、こんなふうに証明したら、神さまが存在しておられることをあなたは納得するのでしょうか、というような議論はしていません。聖書は神さまの存在について、何かを証明しようとはしません。もっと言えば、神さまの存在証明には興味を持っていないということです。神さまが、わたしたちがその存在を証明しようが、しなかりょうが、ちゃんとおられるのです。そして、もうお語りになりました。だから、聖書は、その語って下さった神さまの言葉を書き記すだけです。その聖書は、神さまからの問いに満ちています。そして、神さまが与えてくださっている信仰の答えに満ちています。

ただ、そうしたことをよくわきまえながらも、わたしたちはまたもう一つのことを知ります。それは、聖書において

は、神さまからの問いと神さまからの答えの中で、わたしたち人間が問うことを決して無視してはいないということを知ります。むしろ、神さまの言葉に包まれています。だからこそ、わたしたちに人間の問いが、生き生きとしていることに気がつきます。詩編などに目を留めますと、そのことがよく分かります。例えば詩編第 42 篇です。この詩編の詩人が病気だったのか、理由は分かりませんが、とにかく神さまの姿が見えなくなってしまっています。周りの人からも、「おまえの神はどこかへ行ってしまって、分からなくなっているのではないか」と言われても仕方がないような状況に置かれた人が歌った言葉です。

涸れた谷に鹿が水を求めるように

神よ、わたしの魂はあなたを求める。・・・

昼も夜も、わたしの糧は涙ばかり。

人は絶え間なく言う

「お前の神はどこにいる」と。・・・

わたしの岩、わたしの神に言おう。

「なぜ、わたしをお忘れになったのか。

なぜ、わたしは敵に虐げられ 嘆きつつ歩くのか。」

わたしを苦しめる者はわたしの骨を砕き

絶え間なく嘲って言う

「お前の神はどこにいる」と。

その時にこちらが胸を張って「いいえ！」と答えられるかという、そうはいかないのです。「お前の神さまはいったいどこにいるのか」と言われたときに、自分も疑ってしまう。希望を失ってしまう。神さまを信じることは神さまを信頼することだ、神さまを希望とすることだ、などと言うけれども、自分にはその確信も失われてしまって、今はどうしていいか分からなくなってしまいます。

なぜうなだれるのか、わたしの魂よ

なぜ呻くのか。

この呻きは獣が呻くような呻きです。呻く時、そこに喜びはありません。呻く時、そこに希望はありません。痛いから呻きます。辛いから呻きます。不安があるから呻きます。絶望しかないから呻きます。自分の中を覗くと呻きしかない。言葉も出て来なくなる。自分の言葉と言えば呻きでしかない。この詩人はそう歌います。

ところがここに、不思議なことがあります。この詩編はそういう呻きばかりだけに満ちていません。たとえば突然こういう言葉が出てきます。「わたしの魂はうなだれて、あなたを思い起こす。・・・昼、主は命じて慈しみをわたしに送り 夜、主の歌がわたしと共にある」。昔を思い起こして、昔はそうでしたねと言うだけではなくて、今がそうですと言います。他にも不思議な言葉があります。「わたしの岩、わたしの神に言おう。

『なぜ、わたしをお忘れになったのか』。ここでは「神さま、あなたはわたしをお忘れになったのですね」と言いながら、「あなたは、わたしの岩であり続けます」と言っているから不思議

です。

最初に、まず先に神さまからの問いと、神さまからの答えがあって、その中で神さまへの問いは生まれてくるのだと言いましたが、そのひとつの姿がここにあります。この詩人は、本当に喘ぐようにして、「神さま、あなたが生きておられることをわたしに示してください」と言いました。自分を支えるものは全く何もないようなところにあります。ところがそこで、不思議なことに、信仰の一番深いところに同時に立っています。そこでは「神さまは、わたしの岩です」と言っています。詩人自身が神さまの存在を疑ってしまっているようなところにおいてもなお、それでも神さまは、わたしの岩なのですと言いつけることができるのです。

今日の聖書箇所、使徒言行録の第 17 章で、パウロは神さまの存在をアテネの人たちにたたきつけるように語りました。パウロはギリシャの人たちに向かって言います。あなたたち

は、神を知っていると言いながら実は、知らないのではありませんか。あなたがたは神を知っていると言いながら、ただ、知らない神を拝んでいるだけではないのですか。しかも、そのあなたがたに対して、神は、そっぽを向いておられるのではないのですか。パウロは「**実際、神はわたしたち一人一人から遠く離れてはおられません**」と言いました。それどころではありません。神さまは本当に近くにいてくださいます。わたしたちは神さまの内に生き、動き、存在しています。わたしたちは神さまの子孫です、と言ってもいいくらいですと言いました。どうしてそんなことが言えるのか。パウロは最後にこう言います。「**神はこの方を死者の中から復活させて、すべての人にそのことの確証をお与えになったのです**」。

神さまからの問いかけ、そして神さまからの答えは、あのイエス・キリストの復活のなかにはっきりと示されているではありませんか。それをわたしたちは信じているのです、そしてあなたたちに今告げます。これがパウロの言いたいことでし

た。これを聞いたギリシャの人たちは笑います。「なあーんだ、イエスと復活という二人の神についての話なら、聞いてやろうと思ったけれど、死んだ人間が復活するなどと言う。そういうばかばかしいことなら、話は別だ。いずれまた、聞いてやることにしよう」。もちろんこういう答え方は、改めて聞く気はないことを示しています。その意味では、パウロはアテネでの伝道に失敗しました。ほんの僅かな人しか信仰を持たなかったからです。けれど、この主イエス・キリストの父なる神さまの、アテネの人たちに対する愛は変わらなかったと思います。そっぽを向いたからといって、神さまが突然離れて行ってしまうことはないからです。

わたしたちは神さまを信じます。神さまを信じるから、今日もこの礼拝で神さまを信じて生きてきた年数に関わらず、一緒に礼拝を守ります。そしてまた、まだ告白しておられない方と一緒に礼拝を守ることを喜びとします。ときに呻くことがあるかもしれませんが。ときに神さまのお姿が見えなくなるこ

讚美歌 讚美歌 21-451-1 (くすしき恵み)

献 金 讚美歌 21-65-2

報 告 週報の3頁を御覧ください。

祈 禱 それぞれの場で黙禱をお願いします。

主の祈り 讚美歌 21-93-5 A(天にまします我らの父よ)

祝 禱 平和のうちに、この世へと出て行きなさい。
主なる神に仕え、隣人を愛し、
主なる神を愛し、隣人に仕えなさい。
主イエス・キリストの恵みと、父なる神の愛と
聖霊との親しき交わりとが、
あなたがた一同と共にあるように。 アーメン

後 奏

<礼拝終了>